

生徒講評文

8月 2日 4校目	大垣西 高等学校
ゆめのあと (既成・ 創作)	
<p>とある学校の放課後の空き教室。写真部の二人がある箱を見つけるところから物語は始まる。その中には何枚かの写真と、「ゆめのあと」と題された小説があった。この作品は、その小説に記された過去の出来事を軸として進められる。</p> <p>音楽大学に進み、歌手になりたかったけれど、経済的理由によりあきらめざるを得なくなり、「私程度の人間なんてごろごろいるから」と友人に話して合唱部も進学も辞めてしまったアイ。自分のやり遂げたい目標があるのに様々な理由からそれを達成することができないという、私達の日常にあるような悩みを題材にして、観客の共感を誘っていた。</p> <p>この作品からは、評価のために何かをする愚かさについて考えさせられた。小説家になりたかったユメノの「物事を大成させるためには人の評価が必要」という言葉や、写真部のサツキの「評価されるための写真は撮らない」という言葉の葛藤から、人からの評価のために自分のやりたいことをやるのではなく、自分がどうしたいのかが重要だということが伝わってきた。</p> <p>ユカとサツキがアイを追いかけていったときの夕焼けを表す照明は、本物ではないかと思うほどであった。その後の二重唱は、歌い終わった瞬間に自然と拍手が沸き起こるほど見事で、それを写真部が撮影するところを描くことで、アイが、進学は諦めても本当に好きな歌をこれからも歌っていくことが表されていた。現代の写真部員がこの写真を見て、自分の力で写真を撮ろうと決意するのも納得できた。</p> <p>シンプルで分かりやすく、奇をてらわずに真っ直ぐに演技をしているのが印象深かった。大垣西高校のみなさん、お疲れさまでした。</p> <p style="text-align: right;">大垣南高校 大橋愛未</p>	

